

佛誕二千五百年に際會して

駒澤大學佛教學會學生諸氏に寄す

入 谷 智 定

本年は釋尊が生誕せられてから、二千五百年目に相當すると云ふので、此を記念する催しが諸方面に行はれつゝあるのは洵に喜ばしいことである。此の際佛陀の恩澤に浴する佛教徒たるものは、斯る記念事業を行ふと否とに拘らず、眞に釋尊の人格を欣慕し、その此の世に遺されたる偉大なる功績を讃嘆し且つ其に深く感謝の意を表する處あると共に、是を機會に更に進んで佛陀の高大なる精神を將來に生かし、發展せしめむとするの覺悟を強うする處がなくてはならぬと思はれるのである。

往昔印度に生れたる單なる一人間の思想感情が當時の印度の精神界を風靡したるのみならず、二千五百年の久しきに亘つて、然も全東洋に涉つて幾十億と云ふ人間の精神を動かし、尙無量劫の將來に向つて恒河沙の衆生を慶福ならしめむとする可能性を持つと云ふに至つては、何人と雖も其の人格の偉大なるに驚嘆し、其の功德の廣大なるを嘆賞し、且其に感謝せずにはおられない筈である。のみならず一たび其の教説が間接に人類文化の上に及ぼしたる影響的功績に想倒したる時は此の驚嘆感謝の念は更に更に强大となるを覺ゆるものである。今誠に其が單に我が國の文化の上に及ぼした

る影響の一、二に就て觀るに、若し釋尊が二千五百年の昔に印度に生誕せられなかつたとしたならば、吾が國が戰亂の菴と化した當時に於て吾が國の精神文化が佛教徒の手に由つて其の命脈を維持されることは出來なかつたであらうし、若し佛教徒が其を擁護しなかつたならば、吾が國今日の精神文化のあるものは今日あるが如き形態を備へて居ないであらう。又佛教が我が國に渡來しなかつたとしたならば、今日世界に誇るに足ると稱せられなく吾が精神文化の一異彩たる藝術の如きも今日あるが如きの進歩發達を遂げて居ないことであらう。或は眼を轉じて現代文化民族の間に特異性を發揮する處の吾が國の祖先崇拜を觀るも、多大に佛教の影響感化を受けて發達したることは明であるし、而して此の事實は取りも直さず釋尊の教説が吾が國民道德の一特質たる醇厚なる美俗の發達に貢獻せるを物語るものである。更に一步進んで考察すると吾が國の佛教は一面に於て多くの時代、恐れ多くも皇室の御歸依を得、其の厚き御庇護を蒙りしが爲めに容易に流通することが出來たと共に、他面に於て佛教精神は皇室を中心とする幾多の政治的施設となつて發現し、剩へ憲法の一部を爲して政治的制度化したことさへある點杯勘へ合せると我が國の佛教は其の過去に於て諸他の要素と相俟つて、今日觀るが如き實に世界に冠たるべき廣義の我が國體、皇室中心の國民精神を結成せしめたる基礎工事の一要素を爲したものと觀ることが出来るのである。

斯く考へ來ると佛誕二千五百年に際會して釋尊の偉大なる人格を偲び、其の宏徳を稱へ奉ることは佛教徒たるものには勿論のこと、其の信仰が神道にあると、クリスト教にあると將又無信仰であるとに拘らず、均しく我が國人に取つて大いに意義のあることゝ思はれるのである。

次に佛教徒たるものは此の機に際して斯る偉大なる釋尊の精神を現在並に將來に向つて長養發展せしむべき義務のあることを深く自覺することは、佛陀に對して厚く法乳の慈恩に酬ゆる所以のものであると思はれるのである。一體に宗教に限らず、文化と云ふものは其れ自體に如何に多大なる價値を包藏して居ても唯其をあるが儘に長年月に亘つて護持すると云ふ丈では其が人心に作用きかける力は年と共に鈍るのが常である。文化をしてその斯る力を鈍磨せしめざらしむとすれば、其を保持する者の側に於て不斷に、文化其のものを發育成長せしむる處がなくてはならぬのである。宗教的信念に於ても亦然りである。佛教が如何に多くの價値を藏し、又其が過去に於て如何に多く人類文化の上に寄與する處があつたとしても、其を護持する佛教徒に於て、唯單に殿堂伽藍、葬儀、法式、佛典文獻杯の形物を保持すると云ふ丈では佛教は沈滯してしまつて、人心を支配する力は減退し、軽ては「隋性に依つて其の生命を存續する」杯云ふ誹謗を受ける様になるのである。其故に永い間の傳統となつて存在して居る佛教の精神を何れの時代の人心にも活躍せしめむには、佛教徒たるものは不斷の努力と息まざる自己の修養とに心懸ける處が無くてはならぬ。流通の對象たる社會は日進月歩の勢を以て進歩する以上、法の流通者たるものは宜しく其の説く處を各時代人の精神の持つ處の諸情操と巧に調和させて行かなくてはならぬ。縱ひ中身は同一であつても、謂はゞ其を纏ふ處の衣を時代時代の風俗に合致せしめて行かなくては、佛教は獨り時代から取り残されてしまふ恐れがある。否單り説き方のみならず佛の御教其のものも時代に依り或る程度迄は取捨して説かなければならぬ場合があることゝ思はれる。佛の教の中に於ても知的方面の事に於て特に然く感ぜられるのである。鐵船水上に浮ぶと云ふ語句が妙に神祕的に解せられたのは今日から觀れば昔日の夢である。東

京に坐り直接ロンドンの住人と會話する事が出来る今日と佛在世當時とは常識の水準に於て異なる處が大であるが故に、若し佛教徒にして徒らに佛説の文字語句の末節に拘泥して時代の常識と相容れざるが如き教説を爲して得々たるものがあるとしたならば、其は佛の在世當時の佛の精神を汲み誤るものであり、延いては佛教を枯死せしむるものであつて、佛陀の眼からは其の宗旨に忠實なる精神は諒とせられるであらうが、内心有難迷惑を感じざることであらうと思はれるのである。

斯く云へばとて直に之を以て三千年前に起つた佛教が廿世紀の今日には適合しないものであるとか、或は佛祖、宗祖の教説を無視し、宗派存立の理由迄も無視して、勝手氣儘なる言説を吐いて以て時代精神に迎合せよと主張するものでは毛頭ない。佛教は永遠に人類の至寶である事は論を俟たないが、徒らに佛説、道教の語句の末節に拘泥して爲めに其の精神迄も没却して佛教を枯死せしむることながらむを強調せむとするに止るのである。

現代の佛教徒が斯る使命を強く意識して、切々孜々其の修養に勉むるに於ては、其の経験が聽ては發して明治の碧巖錄となり、大正の信心銘となり、昭和の正法眼藏となつて出現するに相異ない。此の新しく出づる處の從容錄なり、風彩を更めたる證道歌なり、面目を新にしたる眼藏なりは其の根底に於て、印度、唐宋の古代に、室町、鎌倉の遠きに現はれたる其等と同一の精神を横溢さすものであつても、其の持つ處のニュアンスを異にする點に於て一層現代並に將來の人心にアツピールする處があるに相異ない。斯くなれば佛祖の精神は愈々發展することになると思はれる。

近頃時代精神の要求であるか、佛の教を渴仰するの聲が喧しく、佛教のルネイスサンスが到來した杯の言葉を耳にす

ることは洵に結構なことであるが、此の際佛教徒たるものゝ大いに戒心すべきは、如何に社會の要求なりとは云へ佛教徒が無暗に之に胸おどらして粗餐以て此の要求を十二分に満足せしむるに於ては、其の結果として、又其の反動として或は宗教に對する社會人の關心をして飽滿厭忌の方面に轉向せしむることなきやも保し難いことである。殊に何事に依らず熟し易くして且冷め易い我が國民性に根ざせる此の要求に對して佛教徒の側に於て大いに用心して、此の要求をして單なる一時の薬罐願心たらしめざる様、巧に誘導する必要があると思はれると同時に又佛教徒が佛教興隆の波に乘じて進行する間に知らず／＼の間に陶然たる悅樂氣分を誘發せられ、延いては爲めに驕慢の心を起し、折角勃興し始めたる精神的氣運を僧侶自ら冷却、破壊、他轉せしむるが如きことありては、佛教の將來に一大暗影を投ずるものであることを想到しなければならぬ。妄言多謝。

(昭和九年十一月十四日記草)